

子規と新聞「日本」

はじめに

正岡子規が新聞「日本」を舞台に俳句革新・短歌革新を行ったことは周知のところである。新聞「日本」というのは、小新聞、大新聞と言われた時代の、大新聞に属するもので、政論などを主に記事として扱う新聞であった。そのため、俳句のような文芸を載せるのは一般読者のための従属的な位置にあたる。この稿では、新聞「日本」の創刊、子規の入社、そこで子規が何を行おうとしたかを考察したい。

新聞「日本」創刊

新聞「日本」の第一号は、明治二十二年二月十一日、紀元節の日に発行された。

社長の陸羯南^作は、安政四年十月十四日に生まれた。幼名巳之太郎

藤田 万喜子

後に実と改める。旧姓中田。津軽藩^庄、中田謙斎の長男。父謙斎は近侍茶道役、坊主頭をつとめた。明治六年に藩校である稽古館に入学したが、この学校が廃校になり、後身の東奥義塾に入学した。十二年、絶家していた親戚の陸治五兵衛の家を再興するために陸姓を名のり、陸実となる。

明治九年司法省法学校の第一期生となるが明治十二年^庄退学。再び、明治十四年五月に上京。十六年に太政官文書局に勤務する。勤務先で、翌年、高橋健三を知る。後年無二の親友となった人物である。この当時を

「余の始めて高橋君の面を知れるのは明治十七年太政官の文書局に於てせり。文書局なるものは今の山県侯が当時参議院議長として『官報』を創刊せし時、新に造れる一官局なり。」高橋君は青木貞三、関新吾等と共に書記官として局に在りしと覚ゆ。余は衆多の小

吏中に在りて時々君の面を見たるも、未だ一語をも交へたる事あらざりき」と羯南は回想している。

明治十八年十二月二十四日に太政官制が廃止され内閣制度が創設されて、文書局は官報局と改名。高橋は内閣官報局次長、羯南は内閣官報局編輯課長となる。この頃については、

「十八年の末に至りて例の大改革と為り、太政官は廃せられて内閣といふを置かれ、同時に文書局は官報局と改名せられて、規模及職権は大に縮小せられたり。余の出勤せる取調局も亦閉鎖せられたれば、余は属官に任せられ官報局勤務と為れり。高橋君は官報局次長として余等其の指揮を受くる事なれば、此の時始めて君と親しく相接するに至れり」と回想しており、上司部下の関係から交わりが深くなったことが分かる。

羯南は、官報局で官報の編集に従事していたが鹿鳴館に象徴されるような欧化主義による政府の条約改政策に反対し、谷干城が公にした条約改正の意見に共鳴して内閣官報局を退く決意をした。局長が高橋から曾根荒助に代わったのを契機に明治二十一年三月に退官した。

そして、翌月九日に「東京電報」を発行。これは、新聞「日本」の前身となったもので、まずこの新聞の創立の事情について、大町桂月・猪狩史山著『杉浦重剛先生』、古一念公編『古島一雄』によっ

て説明したい。

高橋健三の前に太政官文書局長をしていた青木貞三は、経営していた「東京商業電報」（相場新聞）を国家主義の政治新聞に改めようとし、高橋と陸に相談。その結果羯南がその業務を継承、「東京電報」と改題して発行した。

羯南が共鳴した谷の意見というのは、政府の進めている、欧米諸国の関心をかう傾向のある条約改正案でなく、日本の風土に根ざした法律を作り、国民精神を振興すべきであるというもので、治外法権撤廃の一つの段階として裁判官に外人を残すゆき方は、外国に政務へ干渉させる端緒を開くとして攻撃し、天皇尊重と立体政体の確立を説いたものである。

羯南は谷のこうした主張を新聞の力で国民世論として広げてゆくうと考えていたのである。国粹發揮（主義）の立場からの政策批判や文明批評を行っていった。月刊発行部数は十万七千八百五十二部で、朝日新聞、毎日新聞の二分の一ほどで、その経営は苦しく、困難であった。

これより前の、明治二十年四月に、国粹主義を唱道していた杉浦重剛は新聞発行を目的とした連判状を作成していた。その同盟者は、杉浦重剛、巖谷立太郎（漣山人の兄）、平賀義美、宮崎道正（大学南校）、谷田部梅吉、長谷川芳之助、小村壽太郎、高橋健三、谷口

直貞、中村彌六、河上謹一、伊藤新六郎、西村貞、千頭清臣、國府寺新作、手島精一、高橋茂、福富孝季、の十八名であった。杉浦と小村が中心となり、乾坤社と名づけていた。その趣旨は「吾々有志共同事を執るの一要員として印刷機械を供給し、専ら印刷事業を経営し、且つこの事業を根基として往々一つの新聞紙を発行し、吾々有志立世の機関と為すの目的」とした。そして熊田活版所を経営していた。

乾坤社メンバーの中に羯南の友人である高橋健三がおり、西洋から帰った福富、千頭と杉浦重剛等と会合して、羯南が発行する「東京電報」の改良を計った。しかし改良は容易でなく、ついに新しく新聞を発行する方向にまとまり、明治二十一年十二月二十五日に先に述べた谷干城の屋敷で最後にそれが決定されたのである。

この辺りについて、谷の日記を見ると、

明治二十一年十二月十三日、「福富氏来る、新聞の事」

二十四日、谷の所へ福富がきて、先月（十一月）

来苦心の事業義侠の力により基礎確立の吉報を伝える。辻氏より弥生町（浅野長勲）の方も異議無しの談。

二十八日、「六時頃より弥生町に行く。来会する者杉浦、福富、古荘、千頭、陸、

高橋諸氏、及宮崎某、野村文夫等なり。十一時頃帰る。新聞の名称単に日本と冠する議あり」（島内登志衛編「谷干城遺稿」上）

と書かれてあり、二十一年の末には計画がほぼ固まり新しい新聞の題名も決まっていたことが分かる。

乾坤社のメンバーの助力で、「日本」の創刊号は熊田活版所で印刷され、帝国憲法発布の日である紀元節、明治二十二年二月十一日に刊行された。ふさわしい出発であった。

浅野長勲と谷干城が出資。杉浦重剛が、明治二十三年三月まで、社長代理をつとめる。高橋健三、福富孝季、千頭清臣、宮崎道正らが相談役となっている。一時期は谷や乾坤社の政治活動の機関誌的存在として活躍した。

二月九日に廃刊された「東京電報」の「廃刊の辞」で、羯南は新しく刊行する「日本」が「東京電報」の後身であることに触れたあと、「日本」の使命は、ヨーロッパ崇拜の風潮を正すところにある、「国民精神を正し、国民精神を発揮し、一国の独立の基礎を立てる」と述べた。また、「日本が泰西文明を採るに当たりては、常に国民精神を以て陶冶し、之を日本化にせんことを力むべし」とも述べて、

国粹發揮の立場を主張した。

羯南は、「日本の」「創刊の辞」でも「我が『日本』は固より現今の政党に關係あるにあらず、然れども亦た商品^{（一）}を以て自ら甘んずるものにもあらず。吾輩の採る所既に一定の義あり。」と、当時の新聞界が政權を争うか私利を得る商品となっているが、「日本」は違う立場であることを述べ、創刊の趣旨として

「先づ日本の一旦亡失せる『国民精神』を回復し且つ之を發揚せんことを以て自ら任ず。」「国民精神の回復發揚を自任すと雖も」、西欧文明の善美や權利自由平等といった考え方や哲理や風俗習慣、それに理学經濟事業などを「日本に採用するには、其泰西事物の名あるを以てせずして、只日本の利益及幸福に資するの實あるを以てす。」^{（二）}

のような主張を述べた。

しかし、この国粹主義は決して攘夷論的な排外的國家主義でなく、「外に対しては国民的特立、内に向かつては国民的統一」を説いた国民主義であり、近代的なナショナリズムであった。これを基調に当時の政治社会思想文化を批判していったのである。

新しく国粹保存と人民の自由尊重を主張する新聞としたものであった。

これらの精神的な面に共鳴した子規は新聞「日本」を舞台に日本

の伝統俳句革新の實踐をはかり、新聞「日本」から言えば、その主張が逆にそれを容認したのではないかと考える。

子規と羯南、新聞「日本」入社

子規と羯南との關係は、叔父の加藤恒忠（拓川）と羯南とが司法省法学校で同窓であったことから生まれた。

初めて会ったのは明治十六年六月のことで、このときを羯南は次のように回想している。

「やつて来たのは十五六の少年が、浴衣一枚に木綿の兵児帯、いかにも田舎から出たての書生ツコであったが、何処かに無頓着な様子があつて、加藤の叔父が往けと云ひますから来ました、と云つて外に何も言はぬ。ハア加藤君から話がありました。是から折々遊びにお出なさい、私の宅にも丁度アタタ位の書生が居りますから、お引合せしませう、と云つて予の甥を引合はした。やがて段々話する様子を見ると、言葉のはしぐさに余程大人じみた所がある。対手になつて居る者は同じ位の年齢でも、傍から見ると丸で比較にならぬ。」

「流石に加藤の甥だと此の時はや感心した。」^{（三）}

この大人びた少年が再び羯南を訪問したのは十八年、このとき子規は東京大学予備門生であった。羯南は、「予は驚いた。田舎から出て来て二年も経たぬ内に、予備門に入るなどは余程珍らしい」^{（四）}

という感想を抱いた。

その後、明治二十四年、帝国大学文科大学学生であった子規が根岸の陸の家を訪ね、根岸に座敷を供する家の世話を頼んだことがあった。陸は大学卒業を勧め、子規が俳句の研究をするというのを聞いて、どうする積もりか、これで文学に貢献するというのは了簡違いだと心配し、忠告した。しかしその後、子規の叔父の加藤拓川の紹介で新聞「日本」に入社の話が持ち上がった。入社面接をしたのは古島一雄で、入社して芭蕉以来墮落している俳句を研究したいと子規が言う、これに対して小島は大学を卒業してからでもよいではないかと返事、しかし子規の、一年が待てない、試験ために学問をしているのではないと言った言葉が気に入り、子規の文章を載せることになった。

羯南も小島も俳句の価値や子規の俳句がどれくらいのものか知らなかったが、「古い俳句を復興して、之に新生命を吹き込むといふ意気に共鳴し」、これが社の方針と同じであったため子規を採用したのであった。

子規の新聞「日本」入社の日は明治二十五年十二月一日だが、本決まりとなったのは十月十九日、出勤は自由で仮入社となっていた。「今日之処では私は社へは一度も行かねどもまず平社員の有様に御座候然るにこれが突然と本社員となるは（仮定）その間何

の事情も無くしては甚だ間のわるきこと」という発言から関係者としての自覚をこの頃より持っていたことが分かる。

入社に当たっては叔父の加藤恒忠と社長の陸羯南が友人関係にあつたことは大きな要因であろうが、子規が新聞「日本」に入社することをなぜ希望したかについてまとめると次のようになる。

1、日本の小説（「月の都」）の挫折から。子規は文学革新の志向を日本の風景そのものが「美」を持つという日本の自然美の肯定のうえに立って、短詩の革新に向けた。子規には日本尊重の志向があり、日本男児の季節、士の意識とも関わりあっている。へこのような自然美の發揮という方向に決定づけたのが新聞「日本」の主張精神であったと考えられる。

2、新聞「日本」の主張に不覚共鳴するところがあつたから。創刊号の「日本と云ふ表題」で、羯南は日本の美を形づくる必要のあることを説き、「我が工芸は欧州著名の批判家も特立固有の美あることを許せり」と、日本独自の美の存在を強調。日本固有のものを尊重しながら、「西洋諸国の工芸文芸を愛する」ことが必要であると説いた。前にも述べたが、新聞「日本」の主張は、日本の利益及び幸福に資する実のある国民精神の回復であり、それを踏まえて泰西文明の善美を吸収していくという「国粹發揮」で、これに子規の国益に回帰する日本精神の尊重が結びついた。和魂

洋才という西欧の受け容れ方に同旨のものがあつた。

日本新聞社社長の陸羯南と叔父加藤恒忠との親交からという単純な理由からでなく、それを越えたものが存在していたのである。それは「月俸十五円」「私はまづ百円くれても右様の」(国会とか朝日とかの三十円乃至五十円の月俸)「社へは行かぬ積」(国会とか)のような発言からも窺い知ることができる。

3、「日本新聞社長の陸羯南を初めその社内の人々の氣風を好ましく思つた點もあろうし、又かねて志望してをつた文学の行動を起すことが出来るといふ望みもあつたからであらう。」「大学を中退して日本新聞社に入つたのも、新聞に據つて志をのべよう、といふ考へであつた。」といふ発言から子規が発表の場を持ちたかつたということが分かる。

新聞「日本」を「場」とした子規の革新運動

最初に「日本」に掲載された文章は、明治二十四年六月下旬から七月にかけて中山道を旅した折りの、六月二十五日から七月四日までの記事で、「かけはしの記」として翌年の明治二十五年五月二十七日から六月四日まで載せられた。上司の古島一雄は、この文章には大した注意を払わなかつた。ただ俳句入りの紀行文というのが珍しかったので新聞の材料にはおもしろいだろうという感想を抱いた

程度であつた。

古島自身は文学は人事とは関係がなく、新聞には不調和なものという考えを持っており、文学を志向する子規が果たして新聞記者として成功するかどうか疑問を抱いていた。

それである日、鳥屋に誘い、盃を酌み交わしながら、俳句を新聞に應用する工夫や新聞文学についての心構えを説いた。それに対し、子規はそんなことは知っているという顔をした。ところが、このようなことがあつた。

「日本」はよく発刊停止となつたが、明治二十五年八月三十一日からの停止の折、古島は多少試験のつもりで「君何か一句ないかい」と言つた。子規はすぐ筆をとつて、

君が代も二百十日は荒れにけり

の句を披歴した。即興の句ではあつたが「君が代も」の中に明治社会に対するある種の批判が込められていた。古島はこの句を見てこんな意をこなしつけることができるものだと思つた。そしてこれが契機となつて、このような俳句時評を子規に担当させた。初めて載つた俳論「瀬祭書屋俳話」(明二五)の場合も、掲載するものがなく仕方なしに載せられたものであつた。それが世の評判になつた。このようにして設けられた俳句欄であるが、俳句の他に短歌、漢詩なども載せられていた。これらの「閑文字」欄は言論中心の紙面

では従属的な存在であった。しかしこれは「欧化主義に反対して起りたる余勢を以て、其主義を鼓吹する上から国文を振興しよう」と云ふ^俳考え」に立ったもので「国文振興」から「国民精神の回復発揚」へつなごうという意図があったのである。新聞「日本」は三面記事や閑文字も国家社会の発展に寄与せねばならないという考えを持っていた。単なる娯楽ではなかった。一つの主義に立脚し、その思想を実現するための一分野としての役目を果たすために設けられたのである。

そして子規選の俳句欄も日本美を見直し再発見していくという新聞全体の方針（「日本と云ふ表題」）の中で位置づけられることになったのである。明治二十六年二月三日文苑欄に最初の選句が掲載された。特別の事情のない限り、毎日、題によってまとめられた選句が掲載されていき、これが世の注目を浴び、その一派が日本派と呼ばれるまでに勢力を拡大していった。

俳句革新に成功を得た子規は明治三十一年から短歌革新を始めている。自分の作品、「百中十首」を載せると同時に「歌よみに與ふる書」、「人々に答ふ」を載せた。しかし、この歌論は掲載に先立って了解を得ていた羯南から注意を受けることになった。趣味を第一とする子規に対し、羯南自身が歌を詠み、自己の見解を持っていたことが子規の歌論を難じることになったのであろう。羯南と子規と

の間に見解の相違、趣味の相違があったことが書簡のやりとりでも分かる。

子規の短歌に対する考えを拾ってみると、

「俳句・短歌・漢詩は形は異なるが趣^俳同じ」、「歌は俳句の長き者、俳句は歌の短き者なりと謂ふて何の故障も見ず、歌と俳句は只々詩形を異にするのみ。」

といった言葉に代表されるが、俳句と短歌を共通な美でとらえている。子規の短歌革新の折の文は特に攻撃的で、社長羯南も非難の言葉を洩らすのであろう。

しかし、羯南は子規が「日本」で短歌の革新を実践しようとしているのを阻止しなかった。羯南が佐幕派出身という同じ立場にあることの共感と共に、子規の才能と人物を愛していたことがこの革新を実現させた。

俳句の革新も短歌の革新もその成功には、明治になってあたりしう始まった新聞というメディアの活用が要因として挙げられる。印刷技術、販売、刊行部数の増加という斬新な方法を、子規が有効に使ったのである。

子規の母八重も生涯、子規を世に出して下さった羯南先生と人に語

り、感謝している。

- 注1 子規より十歳年長である。
- 注2 この藩は子規の松山藩と同じく佐幕派で、批判精神、武士的
気概の上に立った親近感が二人に生まれた。
- 注3 同級に原敬、加藤恒忠、国分青崖、福本日南らがいた。加藤
恒忠は子規の叔父に当たる。
- 注4 「自侍庵の書束」「自侍言行録」明三二・八・一一 『陸羯南
全集』九卷 昭和五〇年一月 みすゞ書房
- 注5 注4に同じ
- 注6 『陸羯南全集』二卷 昭和四四年四月 みすゞ書房
- 注7 小谷保太郎編「子規言行録」序 明三五・一一・一九 『陸
羯南全集』九卷 昭和五〇年一月 みすゞ書房
- 注8 注7に同じ
- 注9 『子規言行録』河東碧梧桐 昭和二二年一月 天泉社
- 注10 明治二五年10月22日付大原恒徳宛書簡
- 注11 明治二五年11月18日付大原恒徳宛書簡
- 注12 『子規と漱石と私』高浜虚子 昭和五八年七月 永田書房
- 注13 「日本新聞に於ける正岡子規君」古島一念 『子規言行録』
昭和二二年一月 天泉社
- 注14 「俳句と漢詩」 日本 明三〇・二・一一
- 注15 「人々に答ふ」 日本 明三一・四・二七